



大賞 [留学生の部]

問題解決学科

——「守破離」の精神から

北海道大学大学院 経済学研究科 修士課程1年

李超君 り ちょうくん (中国)

将来の日本に必要な、問題意識を持った人材を育てるために、大学教育における「問題解決学科」の設置を提言。その根拠、設計の具体性、実効性は審査委員の評価を集めました。文章力と論文としての完成度の高さも際立っていました。

1. はじめに

近年、人的資本が社会の話題になっている。最近話題の本、トマ・ピケティの『21世紀の資本』の中でも、人的資本を重要視し、その人的資本が貧富格差を縮小する重要な力であると指摘されている。特に、少子化問題が深刻である日本社会にとっては、持続可能な経済成長を果たすための人的資本が重要な課題である。

大学教育は、人的資本の蓄積に対して極めて重要な役割を果たす。日本だけではなく、他の国も大学教育の重要性を認識し、多くの力を注いでいる。日本の場合、2015年5月末に、文部科学省から国立大学に通知する素案が公表されたが、内容を簡単にまとめると、「文系の学部・大学院の廃止や定員削減を早急に進めよ」というものである。

私にとっては、それはかなり衝撃的であった。もちろん、経済学的な観点から見ると、科学技術が経済成長に対する貢献度が高いのは事実である。確かに理系の人的資本が、文系の人的資本より一般的に高く評価されるかもしれない。ここから考えると理解できないわけではない。

だが、学問の本来の目的から見たらどうだろうか。学問の価値は、「人的資本=将来利益の現在価値(貨幣価値)」だけでは測れないだろう。もし、学問の価値も将来の貨幣価値で測れば、大学は貨幣価値を創造できる資本主義の部品を作る工場でしかないのではないか。ゆえに、改めて大学の果たす社会的な役割を考えなければいけない。

「守破離」は、武道や禅の教えとして有名な言葉である。基本を「守」りつつ、それを「破」り発展させ、最後に既存の型から「離」れて独創的なものを創り出すことを意味する。学問とは何かを考えるうえで、「守破離」の精神は不可欠だと思われる。本稿では、「守破離」をキーワードに、今後の日本社会にあるべき人的資本について考察する。

2. 守——学問の多様性を守ろう

学問というのは、その文字の通り、長い間、人々が学習しながら問う、問いながら学習することで形成されてきた結晶体である。そこには、人々が学習しながら問い、問いながら学習する過程で同じ観点が集まり、さらにその学問が拡大したり、同じ観点から違う観点が分裂し、新たな学問が誕生する進化のプロセスが存在する。

他方、筆者が専攻する経済学では、2010年に日本学術会議が大学における経済学教育の参照基準を公表した。その内容は、主流経済学である「ミクロ経済学」と「マクロ経済学」が経済学カリキュラムの基本であり、それに「統計学」を加えたものを基礎科目とし、他のいくつかの科目をその応用分野とする「経済学の体系」が示された。ゆえに、このような「経済学の体系」に合わない社会経済学や経済学史といった科目は排除ないし周辺化されるべき対象となり、究極的には、歴史的要因・制度的要因・思想的要因に関わる科目はすべて周辺に追いやられることになる。

経済学は他の科学と違って、人類の活動を研究する科学であり、不確実性、予測不可能性が多い。グローバル化とともに、世界は急速に進化している。新たな情報、新たな商品がほぼ毎日新たに出てくる。その中で、人類の活動も進化していく。つまり、経済学という学問は人類の歴史とともに進化していると言える。ゆえに、経済学にとって、その多様性は極めて重要な特徴であり、その多様性を否定する上記の参照基準の提案は、経済学の有する可能性を毀損しかねないものとなる。高等教育の質を保証するために、参照基準を公表することに反対ではない。だが、基本的には大学教育の多様性を損なわず、教育課程編成に係る各大学の自主性・自律が尊重される枠組みを維持すべきだと思う。

3. 破——専門^{かまち}の框を壊そう

大学の役割は、大きく2つに分類できる。1つは優秀な人材を育てること、もう1つは最先端の研究を先導していくことである。では、優秀な人材とはどのようなものであろうか。将来利益の現在価値(貨幣価値)が多く創造できる人が優秀な人材なのか。筆者は、問題意識を持って問題を発見し、解決できるように努力していく人間が優秀な人材だと主張したい。

ここで2つの問題を指摘したい。

1つは専門本位の教育方式である。例えば、地球温暖化のような環境問題を解決するためには、環境科学の専門的なメカニズムだけではなく、経済学と政治学の知識も重要である。しかし、環境経済学という科目が開講しているが、これは経済学研究科の科目であり、環境科学研究科の学生はほとんど履修しない。逆に、環境経済学を研究している学生は、環境科学の専門的なメカニズムや技術については詳しくない。もちろん、他の学部の講義を聴講することは可能であるが、基本的に自分の学部の授業を履修しなければならない。

ゆえに、ここで提案したいのは「専門本位」の教育方式ではなく、「課題本位」の教育方式である。課題本位の教育方式とは、自らが興味を持つ課題に応じて、その課題解決のために、専門を問わず役に立つ授業を履修する方式である。

もう1つの問題は、今の大学の教育システムでは、ほとんどの学生は学部のと き問題意識を持たず、専門知識を勉強するということだろう。修士課程に進学したら研究計画書を書いて、自分が興味を持っている課題を研究する。つまり今の大学の教育システムでは、このような問題意識を持ち自ら知識を蓄積できるのは修士課程からであるという点である。したがって、学部学生にも、専門知識の形成だけではなく、問題意識や問題解決能力を養成できるような学科が望まれる。

4. 離——問題解決学科を創ろう

私は「問題解決学科」を創ることを提案したい。ここで、問題解決学科をPS (Problem Solving) 学部と略称する。

2年前から、北海道大学では学部向けの新渡戸カレッジ¹⁾というプログラムが進行している。新渡戸カレッジもPS学部のように学生の専門を問わず入学することができるが、基本的に自分の学部の授業を中心にしている。また、新渡戸カレッジは問題解決の養成よりも、世界の共通語である英語を使って、様々な背景を持つ人々と円滑にコミュニケーションをとるスキルを養成することが重要な目標である。PS学部の目標は、高度な専門知識を有するだけでなく、問題意識を有し、他の人と協力しつつリーダーとしてイニシアティブをとれる総合力を有したグローバル人材像を養成することにある。

4-1. 学生募集

大学の全学部2年生から30名ぐらい、元の専門を問わず、各学部から問題意識を持っている学生を募集する。2年生から募集する理由は、学部の1年次は自分が解決したい課題を考えたことがないかもしれないし、もし解決したい課題があっても、その現実性や専門性に精通できていないかもしれないからである。今のほとんどの日本の大学では、1年生は「全学教育科目」を履修して、専門科目を履修するための基礎知識を勉強する。北海道大学の経済学部の「全学教育科目」の場合は、社会科学系の学問領域にとどまらず、自然科学や人文科学など、幅広い学問に触れることができる。幅広い学問に触れる過程で、自分の解決したい課題も考えることができるし、その現実性や専門性を理解することもできる。

なぜ30名ぐらいしか募集しないのか。後でも説明するが、教育の質を重要視するため、PS学部は大学の多くの資源を占有するからである。

PS学部の入学試験は、研究計画書と英語の試験からなる。研究計画書では、解決したい課題が社会に対する意義と現実性、学生が社会に対してどの程度の責任を持っているかが重要なポイントである。また、グローバル化とともに、外国の研究者や他の分野の人材と協力して行くためには英語力も不可欠である。

4-2. 授業方式

PS学部に入学した学生の問題意識を参照し、それらを例えば日本の人口問題、世界の環境問題、日本の持続可能な経済成長問題、発展途上国の飢餓問題、発展途上国の教育問題などの大まかなカテゴリーで括り、学生をグループ分けする。

PS学部の授業方式は少人数のグループ授業であり、メンバー1人に対して、4~6人の生徒で授業を行なう方式である。同じグループである4~6名の学生たちは、共有している問題意識に基づき、課題を解決すべく協力する。そこでは、みんな同じ授業を履修してもいいし、課題を解決するための知識をメンバー間で分担すべく別々の授業を履修してもいい。そのために、PS学部の学生は、どのような学部や大学院の授業も履修可能であり、大学側はそのための施策を講じることになる。

4-3. 問題点

このようなPS学部には、主要な問題が2つ存在する。

- ① 留学などでPS学部から離れる際には、他大学で同様の質を有したカリキュラムを履修できない恐れがあり、国際的に大学間でPS学部構築のために協力する必要がある。
- ② PS学部の設立は、多くの大学の多くの教育資源を占有し、他学部の学生や教員に負担がかかる可能性がある。

5. 終わりに

日本人の友達と色々話をしたときに聞いたことがある。「なぜ日本人の学生は留学をしたくないの？」彼女の答えを聞いたら、すぐに「確かに」と共感できた。「日本が住みやすいから」。中国、韓国に長い間住んだことがあるが、確かに筆者にとっても日本が一番住みやすかった。どの国へ行っても、日本が一番住みやすいと感じるだろう。これは、日本人の、他の人に迷惑をかけないという価値観と関係があると思う。日本人は不満があっても、それを話したら他の人に迷惑をかけるから文句を言わない場合が多いと思われる。また、「12人の優しい日本人²⁾」という映画のように、日本人は「優しい」から自分の意見を言わず、大勢の意見に従おうとするのかもしれない。

その社会の雰囲気、価値観の長所として、みんな「優しい」からお互いのトラブルが少ない。社会が安定的である。つまり住みやすい。だが、短所も多いと思われる。みんな「優しい」からお互いのトラブルや、さらには社会的な問題を解決しようとするのを避ける傾向があると思われる。避けたら解決できる問題もあるが、ぶつけて倒れなければいけない問題もある。

今の日本人、特に若者は問題意識がない、起業家精神がない³⁾とよく聞かすが、そのような「優しい」文化と関係があると思う。だが、社会的な雰囲気、価値観は長い間を通じて形成されたものであり、簡単に改変することはできないし、改変する必要もない。ただ、私が提案したいのは、何人かの人の意識を改変しようということである。少数であっても、他の人をリードし、他の人に影響を与えて社会的な課題を解決していくことができれば、他の人の問題意識を喚起できるのではないか。さらにPS学部が培う問題意識は、起業家精神の中でも、社会のイノベーションを実現できる基礎要因だと思われる。ここで、中国の有名な企業——アリババ・グループの代表者ジャック・マーの有名な言葉を借りたい——「問題があるところにチャンスがある」。

このような人材は、冒頭で論じたような理系学部を推進する近視眼的な教育目的では育成することはできない。文系理系を問わずに、自身の問題意識に応じた多様な学問を学ぶことが不可欠である。このような人材を大学が輩出してこそ、大学は社会的な存在意義があり、経済的にも文化的にも社会を豊かなものにする礎となる。

文中注

- 1) 北海道大学 新渡戸カレッジプログラム
<http://nitobe-college.academic.hokudai.ac.jp/>
- 2) 三谷幸喜が東京サンシャインボーイズのために脚本を書き下ろした舞台劇、およびそれを原作とした1991年制作の日本映画
- 3) 世界銀行 Doing Business 2014によると、日本の起業のしやすさランキングは世界120位
<http://matome.naver.jp/odai/2139899436225745101>
平成25年度創業・起業支援事業（起業家精神と成長ベンチャーに関する国際調査）『起業家精神に関する調査報告書』
[http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331_gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%](http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331_gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%)

参考文献

- ・ トマ・ピケティ『21世紀の資本』みすず書房、2014年
- ・ 一般財団法人ベンチャーエンタープライズセンター 平成25年度創業・起業支援事業（起業家精神と成長ベンチャーに関する国際調査）「起業家精神に関する調査報告書」平成26年3月
http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331_gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%B7%E6%A5%AD%E5%AE%B6%E7%B2%BE%E7%A5%9E%E4%BF%82%E6%95%B0
- ・ 日本学術会議経済学委員会 経済学分野の参照基準検討分科会報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 経済学分野」2014年8月29日
<http://www.iwamoto.e.u-tokyo.ac.jp/memo/SBS/kohyo-22-h140829.pdf>
- ・ 経済学分野の教育「参照基準」の是正を求める全国教員署名 2013年10月28日
<https://pro.form-mailer.jp/fms/8fe8371a49520>
- ・ 北海道大学 新渡戸カレッジホームページ
<http://nitobe-college.academic.hokudai.ac.jp/>

【受賞者インタビュー】

受賞できたことで、
これから頑張っていく
原動力を得た



—— コンテストに応募した理由、きっかけは？

今回の論文コンテストのテーマの中で、「守破離」という言葉に興味を持ち、自分のアイデアを「守破離」の精神から表現したかったからです。

——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

論文を書いたのは1週間ぐらいですが、いろいろ資料を調べたり、頭の中で構想を練ったりすることに長い時間がかかりました。

——この論文を書く上で苦勞したことはありますか？

論文を書く文法や表現は、日常生活に使われる文法や表現と違いがあるので、外国人として正しく書くのが難しかったです。

——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

まずは、入賞して本当に嬉しかったです。今回の論文は自分自身についてもひとつの肯定となりましたし、これからもっと頑張っていくための原動力になりました。

——今、どんなことに興味を持っていますか？

今は、日本や中国の貨幣問題に興味を持っています。